

令和 2 年 5 月 28 日現在

機関番号：37111

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2019

課題番号：17K04392

研究課題名（和文）重度・重複障害児における共同注意と要求・拒否行動の発達に関する研究

研究課題名（英文）Study on Development of Joint Attention including with Request and Reject Behaviors with Educational Supports for Children with Profound and Multiple Difficulties

研究代表者

徳永 豊（Tokunaga, Yutaka）

福岡大学・人文学部・教授

研究者番号：30217492

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：重度・重複障害児を対象として、発達評価の段階意義の妥当性を検討し、発達初期の行動指標による評価データと構造化された活動場面の観察データを分析し、発達の段階意義との相関を明らかにした。行動項目の再検討を行い、要求行動と拒否行動を含む行動項目の関連性を示す系統図を提案した。重度・重複障害児の発達評価であり、コミュニケーションの水準が1歳程度の児童について、共同注意・要求行動・拒否行動に焦点を当て、支援者との相互交渉を分析した。その結果を踏まえて、要求行動・拒否行動の系統的な発達を考察した。注意・要求行動を含む共同注意関連行動の発達の系統図のモデルを示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

研究で提案しているものは、乳幼児研究を手がかりとした発達指標や行動項目、発達の系統図のモデルである。これらのものは、特別支援学校等における重度・重複障害児を対象とした授業を実施する際に、子どもの実態把握、目標設定、学習評価に活用可能であり、有用性が高い。また、重度・重複障害に関する実態把握や目標設定に関する研究では、最近の乳幼児研究を踏まえたものがみられず、その点は学術的な意義が高いと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study was to investigate the validity of significance of developmental stage that S scale checklist was based on. Behavior descriptions of early development including interest behavior, attention and joint attention behavior were reconsidered and the developmental path diagram of literacy and mathematics was suggested. Teachers in special schools for children with multiple and profound disabilities were asked to use this checklist and get assessment information of behaviors. Behavior descriptions of interest behavior and request and reject behaviors were analyzed and the developmental path diagram of interest behavior and request and reject behaviors were suggested.

研究分野：教育心理学

キーワード：発達 重度・重複障害 共同注意 要求行動 拒否行動

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

特別支援教育において重度・重複障害のある子どもの学びを検討する際に、乳幼児の最新は発達研究を踏まえる必要があるが、その取組が十分でなく遅れている。

(1) 共同注意の研究

乳児が示す共同注意の前提となる行動として、共同注視がある (Adamson, 1995)。まず、生後2～3ヶ月に①養育者との短時間の共同注視、そして②乳児が見ている対象に養育者が注意を追随させる共同注視が出現する。その後、③養育者の見ている対象に乳児が注意を調整することで成立させる共同注意、最終的には④養育者の注意を対象に向けさせることで成立させる共同注意の行動が可能となる。また要求行動について、始発的行動要求や応答的行動要求として区別する研究もある。この共同注意関連行動の研究は、1970年後半の先駆的な研究以来、急速に展開してきた。Butterworth(1991)の指さし行動の分析などがあげられ、我が国では木下(2008)等の理論的及び実験的な研究が中心である。共同注意は人間関係の形成において重要な発達現象であるものの、発達支援につながる臨床的、実践的な研究は少ない。

(2) 障害のある子どもの共同注意

コミュニケーション行動としての共同注意を取り上げた研究として、大神(1998)らのグループは、乳幼児の共同注意関連行動の発達の变化と障害の早期スクリーニング法や発達援助の評価に取り組んでいる。このような視点から研究として徳永(2006)は、「学習到達度チェックリスト」(徳永, 2010 改訂)を開発し、臨床的に活用している。発達支援の成果を、このチェックリストで確認する研究が展開されている(古山, 2010等)。

なお、学習到達度チェックリストの核となる部分は、共同注意が形成される1歳半までの発達について注意行動等を手がかりに6段階としてとらえて、「聞くこと(外界の受け止め)」「話すこと(表現・要求)」「読むこと(見ること)」等で、行動項目を整理したものである。

2. 研究の目的

本研究においては、具体的に以下の3点について明らかとする。

(1) 重度・重複障害児の発達評価とその妥当性の検討

日常場面での共同注意関連行動等を手がかりに「学習到達度チェックリスト」によってその発達の様相を評価する。さらに、スコア4までの段階を詳細に検討し、段階を検討する視点、要素を踏まえ、発達評価の妥当性を検証する。

(2) 支援者の働きかけの違いに応じる行動分析

相互交渉場面における支援者の異なる働きかけ(常田, 2007を参考)に応答する行動について、子どもの注視行動、共同注視や共同注意の成立、やりとり行動、要求行動・拒否行動を分析し、発達段階に対応した行動を明らかとする。

(3) 共同注意関連行動を手がかりとした「学習到達度チェックリスト」の活用

重度・重複障害児の実態把握、目標設定に「学習到達度チェックリスト」を活用し、その効果や課題について検討する。

3. 研究の方法

共同注意関連行動を手がかりとした重度・重複障害児の発達評価項目を検討し、実践に適用する。

(1) 重度・重複障害児の発達評価項目の整理

共同注意関連行動を踏まえ、スコア4までについて、より詳細な分析が可能となる発達段階の意義と行動項目を整理する。

(2) 発達評価の項目の妥当性の検討

重度・重複障害児が教育を受けている特別支援学校(肢体不自由)で、重複障害の指導を担当している教諭に、この発達評価の項目により、重複障害児の実態把握を試みてもらい、項目ごとの行動記録をまとめる。

その際に、実態把握の実態を踏まえて、発達評価の項目ごとの課題等について意見をもらい、改善のための基本情報とする。

(3) 重度・重複障害児の指導場面における発達評価の実施

上記の発達評価項目にもとづき、重度・重複障害児の授業場面の活動から、その発達段階や行動特性を検討する。特に要求行動及び拒否行動に関する行動項目の整理を行う。

4. 研究成果

(1) 発達評価項目の検討

重度・重複障害の子どもを対象とする発達評価のためのツールとして開発された学習到達度チェックリストを踏まえ、初期段階の行動項目を取り上げ、その中核的な役割を担っている「発達段階の意義」に関して、スコア1からスコア4までの内容を検討した。

1) スコア4までを7段階で検討する根拠

スコア4までを7段階にする根拠については、以下の点が挙げられた。

段階をみていく視点は、「覚醒」「外界への指向・注意の焦点化」「反応行動・自発行動」であった。それぞれの程度で7段階を位置づけ、その程度を示したのが表1である。

2) 段階を見ていく視点、要素

スコア	覚醒	指向・注意	反応行動	自発行動
4		持続並		
3		持続弱		
2		並		並
1.5		弱	並	弱
1	並	弱	並	少
0.5	弱	少	少	なし
L	少	なし	なし	なし

覚醒

覚醒については「大人の働きかけがない状況」や「大人の働きかけがある状況」で、総合的に判断してその程度を決める。

外界への指向・注意の焦点化

外界への指向・注意の焦点化については、外界への志向・注意がない程度から、外界への指向(スコア1)、注意の焦点化(スコア2)、注意の持続(スコア4)までである。

反応行動・自発的動

発達初期の段階をみていく際に、反応行動と自発行動という視点を導入した。大人からの働きかけや外界の変化に対して、反射的に行動するものが反応行動である。他方、その

ような外界の変化への反応ではなく状況に気づき、行動を起こすものが自発行動とした。自発行動はスコア1から芽生えて、スコア2で確かな行動になる。それに対して、反応行動は、早い段階からみられ、スコア0.5から芽生えてスコア1で確かな行動となると位置づけた。

(2) 実態把握と目標設定の検討

重度・重複障害児の実態把握と目標設定について、実践事例を報告する。

1) 事例の概要と実態

対象のAは、小学部2年生で脳形成不全による四肢体幹機能障害であり、肢体不自由、知的障害があった。スコアについては、表2に示した。

教科	観点	スコア	スコアの根拠となる行動とは	段階・意義
国語	聞くこと	1.5	突然の音にびっくりする。CDの音楽が始まると、動かしていた手を止めることがある。	覚醒、弱い注意の焦点化
	話すこと	1.5	急に身体に触ったり、動かしたりすると、全身でびっくりする反応がみられる。一緒に腕を動かしていると、動かすような感じがある。	弱い自発行動
	読むこと	1	物を見ている様子もはっきりしない。こちらを見ている感じは少ない。ライトで照らされるとまぶしそうにする。	反射的反応
	書くこと	1.5	動き掛けられて、腕をたまに動かす。一緒に腕を動かしていると、動かすような感じがある。	反応行動、弱い自発行動

実態として次の点が挙げられた。

- ・比較的健康であるが、体温調節が難しく、室温が上昇すると体温が上がる。
- ・体幹、下肢ともに緊張が強く、座位保持困難である。仰臥位の姿勢が多く、頭を動かすことは少ない。働き掛けられて、腕をたまに動かす。
- ・物を見ている様子もはっきりしない。追視はみられない。アイコンタクトも少なく、こちらを見ている感じは少ない。ライトで照らされるとまぶしそうにする。

ぶしそうにする。

- ・名前を呼ばれても、明らかな表情や動きの変化は見られない。突然の音にびっくりする。
- ・挨拶の歌で、CDの音楽が始まると、少し表情を変え、動かしていた手を止めることがある。
- ・身体に触って、くすぐると表情が変化することがある。急に身体に触ったり、動かしたりすると、全身でビックリする反応がみられる。一緒に腕を動かしていると、動かすような感じがある。物をつかんだり、握ったりは難しい。

- ・嫌いな食べ物を口に入れると、不快な表情をする。好きな物は、飲み込みが早い。
- ・音楽が好きで、笑顔が見られることがある。機嫌がよいと、「アア」「ウアウア」声を出すことがたまにある。

2) Sスケールのスコアと根拠となる行動

スコアについて、聞くことが1.5、話すことが1.5、読むことが1、書くことが1.5だった。そのプロフィールを図3に示した。また、根拠となる行動の詳細は次のものであった。

聞くこと (1.5)

名前を呼ばれても、明らかな表情や動きの変化は見られない。突然の音にびっくりする。挨拶の歌で、CDの音楽が始まると、少し表情を変え、動かしていた手を止めることがある。

話すこと (1.5)

嫌いな食べ物を口に入れると、不快な表情をする。好きな物は、飲み込みが早い。身体に触って、くすぐると表情が変化することがある。急に身体に触ったり、動かしたりすると、全身でビックリする反応がみられる。一緒に腕を動かしていると、動かすような感じがある。物をつかんだり、握ったりは難しい。

機嫌がよいと、「アア」「ウアウア」声を出すことがたまにある。

3	物を見ている様子もはっきりしない。追視はみられない。アイコンタクトも少なく、こちらを見ている感じは少ない。ライトで照らされるとまぶしそうにする。上方から、名前を呼びかけると、眼球を上方に動かし、こちらを見ることがあったが定かではない。	<ul style="list-style-type: none"> ■ 物の声にむくように反応する ■ 自分が手を動かす ■ 物を1秒ほど見る ■ 顔を手足を動かす 	<ul style="list-style-type: none"> △ 顔を動かす △ 顔を動かす △ 顔を動かす △ 顔を動かす 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 顔を動かす ■ 顔を動かす ■ 顔を動かす ■ 顔を動かす 	<ul style="list-style-type: none"> △ 顔を動かす △ 顔を動かす △ 顔を動かす △ 顔を動かす
2	世界の輪郭や注目の焦点化、自発運動	<ul style="list-style-type: none"> ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> △ 音がする △ 音がする △ 音がする △ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> △ 音がする △ 音がする △ 音がする △ 音がする
1.5	注目の焦点化、自発運動	<ul style="list-style-type: none"> ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> △ 音がする △ 音がする △ 音がする △ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> △ 音がする △ 音がする △ 音がする △ 音がする
1	世界の輪郭や注目の焦点化、自発運動	<ul style="list-style-type: none"> ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> △ 音がする △ 音がする △ 音がする △ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> △ 音がする △ 音がする △ 音がする △ 音がする
0.5	注目の焦点化、自発運動	<ul style="list-style-type: none"> ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> △ 音がする △ 音がする △ 音がする △ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> △ 音がする △ 音がする △ 音がする △ 音がする
L	注目の焦点化、自発運動	<ul style="list-style-type: none"> ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> △ 音がする △ 音がする △ 音がする △ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする ■ 音がする 	<ul style="list-style-type: none"> △ 音がする △ 音がする △ 音がする △ 音がする
スコア	段階・意義	表現・要求	見ること	操作	

* は重複項目 国語

図3 事例のプロフィール

読むこと (1)

物を見ている様子もはっきりしない。追視はみられない。アイコンタクトも少なく、こちらを見ている感じは少ない。ライトで照らされるとまぶしそうにする。上方から、名前を呼びかけると、眼球を上方に動かし、こちらを見ることがあったが定かではない。

書くこと (1. 5)

身体に触って、くすぐると表情が変化することがある。急に身体に触ったり、動かしたりすると、全身でビックリする反応がみられる。一緒に腕を動かしていると、動かすような感じがある。物をつかんだり、握ったりすることは難しい。

発達段階の意義

発達的には、覚醒は比較的良くて、反応行動がみられた。注意の焦点化は弱い段階ではある

がみられた。自発行動として、手足の動きはわずかにあったが、対象を見る行動の自発性が弱い状況であった。

(3) 要求・拒否行動の系統図の検討

「発達段階の意義」を踏まえて、注意行動と要求行動、拒否行動について検討した。

1) 要求・拒否行動の前提となる関心や興味を示す行動

明確な要求・拒否行動が出現するのは、「遊びが終わると要求する」「2つのものから、ひとつをつかむ」等の行動が可能になるスコア8の段階である。

それ以前の行動を検討する際に、第1に人への関心や興味を示す行動を検討することが必要になるし、第2に物への関心や興味を示す行動を検討することが必要になる。

これらの行動を要求行動とするか否かは、支援者の解釈につながる課題であるが、子どもが示す「関心」や「興味」は、子どもが選択したものでもあり、将来的に要求行動につながる行動と理解される。ここでの「関心」「興味」は快につながる行動であり、その反対である不快を表す行動が、拒否行動の高次化していく。

2) 発達段階の意義の視点

藤田 (1996) は、要求行動の発達順序を検討し、視覚系、音声系、動作系という、3系の伝達手段の統合過程と考察している。

他方、辰野ら (1980) は、物に向かう行動から、人に向かう行動を前提として、意図表現のための伝達様式の発達を指摘している。

また、山田 (1982) は、拒否行動として「泣き」行動に焦点を当て、泣きを不快な情動の表出として手段化するころに、手で払う、首振りなどの拒否行動が芽生えてくるとしている。

ここでは「発達段階の意義」を手がかりに、注意・要求・拒否行動を整理した。

「反射的反応」や「注意の焦点化」「注意の持続」「他者への注意」の段階であるスコア2やスコア4の段階、人や物とのつながりが安定するスコア6の段階、さらに「物を介したやりとりの芽生え」等が可能になるスコア8の段階が想定される。

このスコア8の段階になると、人への関心や興味と物への関心や興味が統合され始める段階となる。

つまり、「ひととのつながり」の安定と「ものとのつながり」の安定が形成され、その後それが統合されて、要求の伝達手段として言語が主となるように発達すると考えられる。このような考えを基礎として、具体的な行動を位置づけ、その系統図を「注意・要求・拒否行動のつながりマップ」として図2に示した。

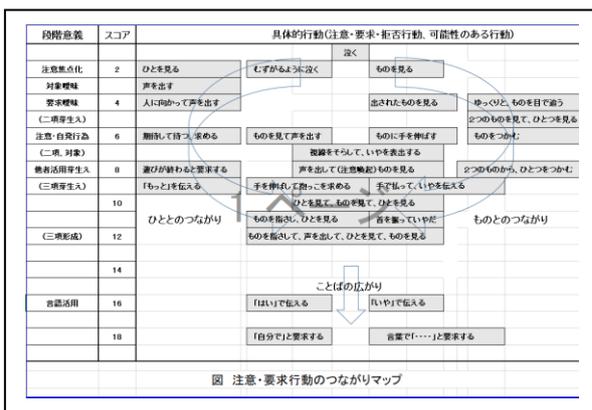


図2 注意・要求・拒否行動のつながりマップ

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田中信利	4. 巻 24
2. 論文標題 学習到達度チェックリストにおける「発達段階の意義」について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 北九州市立大学文学部紀要, 人間関係学科	6. 最初と最後の頁 63-77
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 徳永豊	4. 巻 65 (5)
2. 論文標題 特別支援教育の視点からみた学習評価の改善	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 教育展望	6. 最初と最後の頁 27-31
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳永豊	4. 巻 240
2. 論文標題 重症心身障害のある子どもの学習評価 (1) Sスケールの課題と覚醒の段階	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 肢体不自由教育	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳永豊	4. 巻 241
2. 論文標題 重症心身障害のある子どもの学習評価 (2) 外界への指向・注意と注意行動のカテゴリ	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 肢体不自由教育	6. 最初と最後の頁 44-49
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 徳永豊	4. 巻 242
2. 論文標題 重症心身障害のある子どもの学習評価(3) Sスケールの「補助リスト」とその活用	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 肢体不自由教育	6. 最初と最後の頁 42-47
掲載論文のDOI(デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件(うち招待講演 0件/うち国際学会 0件)

1. 発表者名 徳永豊、田中信利、古山勝、一木薫、吉川知夫
2. 発表標題 障害の重い子どもの目標設定とその妥当性(2) 目標設定の手がかりとなる考え方の整理
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会(愛知大会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 徳永豊、田中信利、古山勝、吉川知夫
2. 発表標題 障害のある子どもの学習評価と授業改善(7) 障害の重い子どもにとっての学びの連続性をどう考えるか
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会(愛知大会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 徳永豊(話題提供)・田中信利(指定討論)
2. 発表標題 障害が重度な子どもにとっての教科学習へのチャレンジ
3. 学会等名 九州心理学会第80回大会(熊本)シンポジウム:障害のある子どものアセスメント~支援の基礎としての子どもの実態把
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 徳永 豊、田中 信利、立岡 里香	4. 発行年 2019年
2. 出版社 慶應義塾大学出版会	5. 総ページ数 88
3. 書名 障害の重い子どもの発達理解ガイド	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担者	田中 信利 (Tanaka Nobutoshi) (90236612)	北九州市立大学・文学部・教授 (27101)	